

乗雲

寺報
第81号

H23.3.1 発行

編集人

〒959-2646 新潟県
胎内市西栄町 2-8
TEL0254-43-2419
FAX0254-43-4560
広蔵寺
住職 神田英俊

メール
otera@kogonji.jp

汝等比丘、常に当に一心に出道を勤求すべし。一切世間の動不動の法は、皆是れ敗壞不安の相なり。汝等且く止みね、復た語いうこと得ること勿れ。時將に過ぎなると欲す、我滅度せんと欲す。是れ我が最後の教誨する所なり。

(遺教經)

お釈迦さまのご入滅は、紀元前三八三年で、二月十五日の満月の夜、八十歳でした。この時期、各お寺では「涅槃圖」を掛けてお釈迦さまをお偲びし読経供養いたします。(旧暦では三月十五日)

涅槃圖には、お釈迦さまの周囲にたくさんのお弟子たち、動物、昆虫にいたるまで集まり、死を悼み嘆き悲しんでいる様子が描かれています。沙羅の樹が一部白く枯れ、枯れていない方の樹には葉の袋がぶら下がっている。お釈迦さまのご様子が変だということになり、天から葉が投げ与えられたが

沙羅の木に引つかかっていた。そこで鼠がその袋を取りに木に登るが、そばにいた猫がその鼠に気付くとさきに捕まえて食べてしまったとの逸話があります。葉を服することもできず、お釈迦さまはとうとう亡くなってしまった。猫は嫌われものになり涅槃圖には入れないことになっている。(描かれている図もある)

「生者必滅、会者定離」という



言葉がある。生まれた者は必ず滅び、会う者は離れる定めである。また、良寛さんは、「今日別れ、明日は逢う身と思えども、量り難しは命なりけり」と詠っている。お釈迦さま同様に、最後には死が待っている。これは誰でも平等にやってくるものです。

「涅槃」とは、インドの言葉「ニルバーナ」を音訳したもので「吹き消す」という意味があります。お釈迦さまが涅槃に入られたということは、煩惱の火を吹き消してこの世から身も心も安らぐところである大いなる仏の世界にお移りになられたことを言います。

大聖釈迦如来涅槃御詠歌(不滅)には、『ひとたびは涅槃の雲にいりぬとも、月はまどかに世を照らすなり』とあります。お釈迦さまを月に喩え、いま涅槃に入られたが、夜空に輝く満月のようにいつも煌々と輝いて、人の世を照らし続けている。その偉大なる教えは今も私たち仏教徒の道しるべとなつて導いてくれています。

私たちはお釈迦さまの教えを依りどころとして、限りある尊い命を大切に生きましよう。

平成二十三年年度年回表

「回忌」	「没年」
一周忌	平成二十二年
三回忌	平成二十一年
七回忌	平成十七年
十三回忌	平成十一年
十七回忌	平成七年
二十三回忌	平成元年
二十七回忌	昭和六十年
三十三回忌	昭和五十四年
五十回忌	昭和三十七年
百回忌	明治四十五年

* 今年の年回忌のご案内は、昨年十二月に正当の各家に通知いたしております。
* 日曜・祝日のご法事の申し込みはお早めにお願ひいたします。

「周」は「めぐる」ことを意味する言葉で、亡くなってからちょうど一めぐりした翌年のその日を一周忌と呼ぶ。回忌とは亡くなった日を最初の忌日と考えて、三回目の忌日が「三回忌」となる。以降は丸六年目が七回忌となる。